

地域畜産振興部門

埼玉県児玉郡美里町

美里町水田農業推進協議会

(代表：渋井 清)

美里町における耕畜連携システムと
地域営農モデルの定着化に向けた取り組み



美里町水田農業推進協議会
のみなさん

美里町は、東京都心から約 80km の埼玉県北西部に位置している。稲、麦二毛作を中心とした水田経営が展開されてきたが、近年、担い手の高齢化や後継者不足等に伴い、農地の遊休化が進んでいる地域である。

古くから小麦などの裏作に力が入られ、経営規模の拡大よりも土地利用率の向上による所得拡大が目指されてきたが、生産調整の影響もあり、近年は夏期の水田は土壌保全としての管理が中心となっており、その有効利用が課題となっていた。そこで美里町では、水田の高度化利用を目的としつつ、既存の水稻栽培機械の活用、町内畜産農家の飼料自給率の向上、安全・安心な粗飼料確保を視野に入れて、飼料用イネの栽培に着目して活動を行ってきた。

推進のためのしくみづくりとしては、飼料用イネ栽培の推進と栽培農家の組織化を進めるための「美里町飼料用イネ協議会」、飼料用イネを利用する畜産農家を組織化した「美里町飼料用イネ利用会」、さらにこの2組織に行政、利用者、農協が加わっての美里町水田農業推進協議会を発足させている。

同協議会は、飼料用イネを麦、大豆と並ぶ主要作物として位置づけた「美里町水田農業ビジョン」を策定するとともに、以下のような活動を展開し耕畜連携に寄与している。

第1に、コントラクターの活用による耕畜連携の推進である。町内には畜産農家、耕種農家ともに飼料用イネ収穫・調製のための専用機械が無く、また、飼料用イネと食用イネの作業時期の競合や飼養管理作業との関係から、耕畜ともに収穫作業に労働をあてるのが難しいため、コントラクターに作業を委託している。このコントラクターの存在が、3組織の役割分担をはっきりとさせ、結果として畜産農家と耕種農家の組織的な連携ができています。

第2に、耕種農家、畜産農家、コントラクター3組織間のコーディネートである。「飼料用イネ協議会」と「飼料用イネ利用会」の間では飼料用イネの利用と水田へのたい肥施用に関する協定を、「飼料用イネ協議会」とコントラクターの間では収穫、調製、梱包に係る作業の委託契約を締結させている。協議会は3組織間に問題が発生した場合、中立的立場として調整役を担っている。また、飼料用イネロール単価は、畜産農家、耕種農家、JA等との話し合いにより、ほ場ごとに設定しているが、この合意形成にあたり中立的な立場で積極的に関与している。

第3に産地づくり交付金の利用にあたって、飼料用イネが普及しやすいように工夫していることである。ビジョンで明確化された担い手農家を対象として、耕種農家に対しては飼料用イネ種子代助成やラッピング資材助成、畜産農家に対してはロール運搬およびたい肥製造に対する助成など、農家の生産意欲を掻き立てるような助成体系を組んでいる。

以上の取り組みにより、同地域における平成17年度の飼料用イネ栽培面積は約23haとなり、10aあたり2,147kgの収量をあげている。また、これまで希薄であった耕種農家と畜産農家の関係が飼料用イネを通じた耕畜連携の推進により、たい肥の流通や麦わらの粗飼料利用など新たな循環システムを生み、さらに、たい肥利用による小麦の高品質化も進むなど、地域の活性化につながっている。まさに、町のリーダーシップによって確立された耕畜連携の地域作りとして優良事例である。

耕種農家作付け会議

美里町で飼料イネを生産している耕種農家は10戸で、全員が飼料イネ協議会に参加している。



収穫直前の飼料イネ

「はまさり」「クサモナミ」「クサユタカ」などを栽培している。



飼料イネの収穫作業

飼料イネの収穫・調製及び梱包はコントラクターが受託している



ロールの貯蔵

ネズミ、カラスによる被害を減らすために、隙間を空けないように積むことを心がけている。



飼料イネの給与

町内の肥育農家では肥育前期に飼料イネを集中的に給与している。



たい肥の散布

耕種農家が運搬し、飼料イネ作付後の水田に2t/10aのたい肥を散布している。

